

あの日あの頃 - 11

石渡伸幸

今年三月、三十三回目の卒業生を送り出します。卒業生の累計は、約 3,500 人になります。

目黒星美学園小学校に赴任したのは、昭和四十七年でした。この年三月に体育館が落成しました。前年十月頃、はじめて、この学校を訪れた時、校庭は今の半分位しかなく、工事中でした。その時は、何の工事かなと思いました。通用門も東側の桑の木付近だったと記憶しています。

それから早、二十年近くを経過しています。十年一昔とよく言いますが、二十年ですから、二昔もこの学校に勤務していることに改めて驚くばかりです。

二十年前の校舎は、今のような四階ではなく、三階で、屋上があり、そこには、音楽室もありました。雨の日に、音楽室へ行くのに、傘をさすというようすでした。今では、なつかしく思います。

星美に来る前の六年間は、中高校に勤務していましたので、高三の十八才から、十才以上も年下の子どもを相手にするということにはじめ、不安がありました。本当に勤まるだろうか、その気持ち交差しました。その反面、がんばろうという意気込みがあったことも事実です。

はじめての小学生。それは、四年生ので、一・二年が横尾先生、三年生が大森先生が担任した男の子(A組)でした。その当時は、1年からA組は、男の子、B・C組は女の子だけのクラス編成でした。今は、三年生までは、共学ですから、随分様子が違います。十才の男の子が四十人あまりいる教室。個性たっぷりな子どもたち。一年生から、けがばかりしている君、特に気にかけていたのが幸いしてか、四年生の一年間に、けがをすることは、ありませんでした。そのことは、ホッとしましたが、ある日、屋上で長縄をしていました。そして、縄をとびそこなって、倒れたY君。日ごろは、おとなしく、けがなどしそうな子ではありませんでした。運悪く、ひじを強打してしまっただけです。大事に至らなければ……と思いながら、保健室へ。しかし、病院へ直行、診断は骨折。頭の中が「」、空白になったのを鮮明に覚えています。顔面そう白。しかし、気を取り戻して、家に電話。申し訳なさそうにしたら、何とお母さんから返ってきた言葉は、「けがするほど、遊んだんですか。ありがとうございます。」と逆に感謝されてしまったのです。そのひと言で、気持ちがスッと楽になり、又がんばろうという勇気もわいてきました。

約二十年のこんな一コマをここに披露したのは、「言葉かけ」の大切さです。

人聞て、こんな些細な言葉一つが何倍にも、いや何百倍にも勇気を与えてくれるのです。

今、ドン・ボスコの教育法を実践している我々。その難しさは、あるものの、現代に失われつつあるものが何かを追究し、それを何とか取り戻そうと一步一步前進しています。これからも、同窓生の皆様は、あたたかく見守ってください。

【同窓会報、第 11 号 - 平成 4 年 1 月 1 日発行 - から転載】